
女神の仮面

Chani

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の仮面

【Nコード】

N6211P

【作者名】

Chani

【あらすじ】

陶器のように白い肌。森深い翡翠眼。

術師の長兄であり天才的>癒し手くを

民は「女神」と呼んだ。

闇が蔓延した世界。

両親が殺された憎しみを糧に>癒し手くとなったオプシディオ。

しかし、最愛の弟は一族に仕える決意をする。

その一族こそ、憎むべき相手

＞真の名を呼ぶ者くにもかかわらず…。

＞真の名を呼ぶ者くの登場人物、オプシディオ。
少年期から翔平に出会うまでのサイドストーリー。

【短編完結】

登場人物紹介

※ 本編を御存じない場合はこちらを参考になさって下さい。

オプシディオ：術師三兄妹の長男。癒し手。

ラカンカ：次男。魔術師。

ミオ：末っ子。盲目で心眼。

ブロジュ：執政。大魔術師。

ファリニス：一族の一人。女当主。今は亡き、真の名を呼ぶ者。

バージノイド：灰色の剣士。護衛士。

男：一族の一人。＞闇くの支配者。

古賀翔平：ファリニスの生まれ変わり。真の名を呼ぶ者。

【設定概要】

一族であり絶対的権力者＞真の名を呼ぶ者＜によって＞支配＜された世界。

民は真の名を呼ぶ者に忠誠を誓い、全てを捧げて生きていた。

しかし、同じ一族の一人である＞謎の男＜によって＞真の名を呼ぶ者＜が亡くなる。

当主不在となった世界は＞闇くに覆われ、民衆は希望を失っていた。
。。

1. 術師の館

空がくすんだ赤みに転じる夕暮れ。

石畳を小走りに進み、すでに閑散とした噴水広場を抜けた。

その先に広がる澱んだ空気。

まだらに蠢く靄が、僕の館を呑み込もうとしていた。

「兄貴！」

玄関から顔を突き出したのは、弟のラカンカだった。

「遅くなった……」

吐息混じりに答え、扉の隙間に身体を滑り入れた。

エントランスに足を踏み入れるなり、続けざまに鍵をかけた。

小窓を鉄扉で塞ぎ、次は窓に取りつく。

夜が来る……。

>闇<が迫る時。それは、誰もが恐怖に震える時間。

そして、明日が無事にやって来る事を願う。

弟をろくに見ないまま、鉄扉で厳重に塞いだ窓を確認した。

「おめでとう、兄貴」

ラカンカはそんな僕の後ろで呑気に弾んでいた。

「ああ……」

苦笑しながらホールを一周する。

「兄貴の噂でもちきりだよ。特に、ほら、兄貴のお客さんが」

蠟燭に火を灯すと、弟は笑い混じりに語った。

一筋の明かりも漏らしてはならない。

一か所、二か所、三か所。

僕の頭の中は、安全の確認、その事でいっぱいだった。

「勲章、貰ったんだろ？見せてよ」

ラカンカは好奇に瞳を輝かせていた。

「屋根裏の窓も閉めたのか？」

僕は多少苛ついてたのかもしれない。

弟の言葉を遮り、最終点検に神経を張った。

「大丈夫だよ。ミオとちゃんと確認したから安心してよ」

ラカンカは白い歯を剥いて笑った。

「そうか…」

無駄に上がった心拍数。自らの手を胸に当て、それを抑えた。

自分でも分かっていて。夕暮れ時になると決まって神経質になる…。

「おかえり、兄さん」

食堂から妹のミオがやって来た。

袖をたくし上げ、両手を前に突き出しながら歩く。

彼女は嬰兒の時に視力を失った。だけど、その事を憂いてなどない。

>心眼のミオく。心で物事の本質を見る術師。

僕の大切なパートナーだ。

ミオにそつと近寄り、その手を握ってやった。

水に触れていたのか、ひやりと凍える。

すると、彼女は安堵の笑顔を浮かべ、僕の腰に両手を回した。

「さっきまで兄さんの客でいっぱいだったの」

その口調はどこか刺々しい。

「いったい、何しに来たんだろ」

ミオは素直だ。いつだって構わず本音を吐く。

他人は我が儘なお姫さま気質に業を煮やしたが、僕にはそれが可愛くてたまらなかった。

「きつと、兄さんの勲章が目当てなのよ」

腹に頬を押し付け、僕の服を強く掴んだ。

「食事しよう」

その頭を撫でながら、笑いを噛み殺して言った。

漆黒の艶やかな髪が心地良い。

「客の前でもこんな調子だったんだ。焦るよ」

燭台を持ったラカンカは肩を竦めた。

「ねえ、兄さんは負けないわよね！」

ミオは纏わりついて離れなかった。今日はやけに絡む。

「ミラーさんとこの娘も来てた。あの子の誘惑になんか、負けちゃ嫌だからね！」

そんな妹を引き摺りながら苦笑で返す。

「負けないよ……」

食堂に着くまで、彼女はしつこいほど食い下がった。

「やだやだ、あの子だけは絶対に嫌！」

たまに粘着質になるミオ。こんな時は決まって寂しさを感じている。困り果てながらも、いつもの様にしっかりと抱いてやった。思った通りだ。僕の胸から顔を上げ、はにかむ様に笑った。

食事の準備は三人するのが常だった。

唯一全員が揃う時間。どんなに仕事が忙しくても、僕はこの時を大切にした。

「すごいなあ……」

綿敷きの小さな箱を真剣に見つめるラカンカ。

僕の功績を讃えた勲章が、その中で光っている。

「みんな大げさに騒ぎすぎだ」

弟の熱の入れように、呆れかえって言った。

「なに言ってるんだよ！癒し手の腕と剣術、両方が認められて初めて貰える称号だ。誰でも手に入れられるものじゃない。聖剣士だよ！」その証である細身の剣が、草に絡まり交差した形。

ラカンカはそれを食い入るように凝視していた。

「僕には過ぎた称号だよ。こんな……」

何でも英雄視したがる今の風潮に嫌気がさしていた。それほど人々は、この世界で希望を必要としていた。

「やっぱり兄貴はすごいよ……」

食事に殆ど手をつけず感慨に耽る。それはどこか、思い詰めた様子だった。

僕はそれを気にしながら、今日の診療録に目を通した。

客の対応に疲れたのか、ミオはソファで転寝うたたねをしている。

それを横目で確認したラカンカは、漸く頭をもたげて言った。

「兄貴…」

その言葉を待っていた。さりげなく視線を上げる。

「兄貴が剣術も学んだのは、俺たちを守る為なんだろう。俺たちの為に、全ての時間を費やしてきた…」

ラカンカの大きくて澄んだ目は、何故か苦悩で歪んでいた。

「兄貴にとって称号は副産物でしかないんだ。だから、嬉しそうじゃない…」

弟の指摘は的を射ていた。

確かに僕は冷静だ。勲章を与えられ、名誉に浸るかと思えば心が揺れない。

だけど、それが何だって言うんだ…。

「俺、決めたよ。兄貴」

下唇を噛む口。緊張で一文字に引き締められる。

ラカンカ…。

「ブロジュ様の元へ、正式に弟子入りしようと思うんだ」

弟の身体の中に火が点いた。

それに対して、僕は意外にも…衝撃を受けてしまった。

「ブロジュ様の元…」

同じ言葉を返し、失った言葉をごまかす。

「うん。ブロジュ様が俺には師匠マスターの素質があるって言うてくれたんだ。俺さえその気なら屋敷に入れって」

次第に熱がこもっていく。

「俺も、もう十六だし…いつまでも兄貴に頼りつきりじゃカッコ悪いだろう。俺だって自立して、みんなを守るような魔術師になりたいんだ」

歳の離れた弟だった。

いつまでも子供だと思っていたのに、気付けば自立を考えるようになってる。

その事が寂しいのだろうか。

いや、そうじゃない。

僕ももっと、別の事で気を揉んでいた…。

「屋敷に入るという事は…>同志<に、なるつもりか…」

激しく動揺していた。

同志。それは、>真の名まことを呼ぶ者<に人生の全てを捧げ、生活を共にする選ばれし者たち。

>真の名を呼ぶ者<が不在の今でも、同志に憧れる者は多い。

ラカンカが、その>同志<に…。

「そうだよ。俺が一員になれるんだ。魔術師にとってこれほど名誉な事はないよ。きっと、父さんと母さんが生きていたら喜んでくれたと思うんだ」

父さんと、母さんが…。

僕は宝石のように輝く弟の目を見ながら、心の底に広がる沼を見つめた。

そうかもしれない…。

「せっかくのチャンスだ」言葉を絞り出した。

「自分の力を試して来い」

弟の将来の為、ここは喜んで後押しをするべき…。

「やったな、ラカンカ」

だけど、僕の片足は、ずぶずぶと深い底なし沼に嵌っていた。

ラカンカは安堵したのか、更に眩しい笑顔を浮かべた。

「ありがとう、兄貴。明日返事をしてくるよ」

彼は何も知らなかった。

僕の陰に潜む、果てしない闇を…。

1. 術師の館（後書き）

全7話です。よろしくお願い致します。

2. 悪夢の時

自室に戻った僕は、勲章を無造作に放り投げた。それは、寝具の上で跳ね、床にコトリと落ちた。疲れた…。

蝋燭に火を灯し、正装した衣を脱ぎ捨てた。鏡をよぎる僕の顔。

足を止め、ふとそれを見つめる。

鏡の中の男。それは、冷えた眼差しの僕。

束ねられた絹の髪。乱れた前髪が片目にかかる。

静脈の透けた肌。森深い翡翠眼。それを覆う長い睫毛が、細かく震えた。

人々は僕を>女神<のようだと言った。

天から舞い降りた女神。奇跡の救世主。

薄紅の唇。漏れる吐息。

これが、僕なのか…？

顔を寄せ、己を睨んだ。

女神…僕が…。

鼻で笑った。

違う…。これは、僕の皮を纏った、他人…。

目を閉じ、込み上げる嗚咽を口から吐き出す。

項垂れながら両拳の間に額を埋めた。

父さん…母さん…。

繰り返す思い出す、>あの日<の出来事。

何も出来なかったんだ。僕は…。

それは、長年に渡り残酷に苛み続ける記憶。

僕が十歳。ラカンカが、三歳の時のことだった…。

「どうしたの、オプシディオ…？」

玄関の小窓から離れない僕に、ラカンカは不思議そうに問いかけた。

「父さんと母さんがまだ戻らないんだ。陽が沈むのに…」

臙脂の空が、次第に濃い藍色に染まって行く。

人通りのない石の街並み。民家の屋根に闇は迫ろうとしていた。

嬰兒のミオを連れ、森へ出かけた両親。

奇妙な唸りを漏らし、微熱を出し続ける妹を治癒する為だった。

癒し手である母を悩ませた原因不明の病。

きつと、ミオの体質に適した療材があるはず…。

その藁をもすがる親の思いが、時間を忘れさせていた。

「迷子になったんだよ。迎えに行ってみようよ」

無邪気に服を引っ張るラカンカに、僕は苛立ちをぶつけた。

「駄目だ！陽が沈んだら外に出ちゃ駄目なんだよ！ここに居なきゃ…」

返された吠え声に、ラカンカは目を丸くした。

唇を山型に歪ませ、目尻を下げる。

幼い弟に分かるはずもなかった。

そう思いながら、僕よりも小さい手を申し訳ない気持ちで握った。

「駄目なんだよ、ラカンカ。何があっても外に出ちゃ駄目だよ。父

さんが『館を守れ』って言ったんだから…」

僕なりに精いっぱい優しく諭した。

それに対して無言で頷いた弟は、無理に笑顔を作ってみせた。

不安か安堵か…複雑な気持ちに涙が滲んだ。

見られたくない。

背中を向け、小窓の鉄扉を半分閉めた。

再び僅かな隙間に貼りつく僕に、ラカンカはそっと身を寄せた。

薄暗いエントランス。

夕暮れには、この小窓も塞ぐように言われていた。

だけど、心配で心配で、どうしても完全に塞ぐ事が出来なかった。

「沈んじやったね…」

ラカンカは僕の横にぴったりと寄り添い、薄闇の中で呟いた。

「大丈夫だよ：ぜったいに、帰ってくる…」

それは、自分自身にも向けた言葉だった。

しかし、闇のベールは、石壁を容易く支配して行く。

もはや、射し込む光など一筋もない。

父さん、母さん…。早く帰って来てよ…。

更に鉄扉を閉めた僕は、辛うじて片目が覗く隙間から石畳を見た。

すると、遠くの方から混乱した物音が聞こえた気がした。

静けさ漂う石の街に、それは明らかに反響している。

息を呑み、目を凝らした。

もしかして、父さんと母さん…。

期待に震えながら、ガラスに額を押しつけた。

鼻息で微かに曇る。

しかし、近づく音はけたたましく、異常な様相だった。

絡まり合う足音。

そこに被さった甲高い悲鳴。

僕は一瞬にして凍りついた。

闇で良く見えない。でも、見えない事を救いにも感じる。

それほど迫り来る空気は、僕を恐怖に陥れた。

違う、父さんと母さんじゃない。僕たちは関係ない。

お願い、通り過ぎて…。

しかし、更に切迫した怒号が響いた。

「父さん…？」

ラカンカは僕の脇で顔を上げた。

瞬く間に跳ねる心臓。

そうだ…。あの声は、間違いなく父さん…。

人影が見えた。

そのまま館を過ぎる事を願ったが、残酷に望みを払い、僕たちに向

かって来た。

静寂を引き裂く悲鳴。

僕の身体は恐怖で竦み、膝下だけがいたずらに震えていた。

「オプシディオ…どうしたの、ねえ…」

朦朧とした僕を揺さぶるラカンカ。

「ねえ、オプシディオ…」

目の前に居るのは、母さんだった。

ミオを胸に抱き、足を引き摺りながら顎を上げた。

「オプシディオ！」

扉を隔てているにもかかわらず、母さんの鮮明な声が聞えた。

「閉めなさい！」

閉めなさい…。この鉄扉の事…？

「閉めなさい！」

「母さん！」

僕は我を忘れて叫んでいた。

無意識に鉄扉を叩き、一心不乱に呼びかけた。

「母さん！」

「閉め…」

母さんは突然、地面に転がった。

何モノかに勢い良く突き飛ばされていた。

「母さん…」

だけど、僕は知った。突き飛ばされたんじゃない。

黒い影が母さんを包み、全身を鋭利な刃で撫で回していた。

息が止まった。もう、悲鳴すら出ない。

奴らは地面に伏せる母さんを何度も揺さぶった。

そして、おもむろに転換すると、今度は扉に向けて突進した。

慌てて身体を離し、鉄扉を閉じた。

同時に威嚇の突撃で、エントランスが振動した。

悲鳴を上げるラカンカ。

弟の目を塞ぐように、急いで抱きよせた。

父さんの声がした。何度も母さんの名を呼んでいる。

僕は恐ろしくて、これ以上、鉄扉に触れることが出来なかった。

どうしよう…父さん…！

全身が心臓になった。

「オプシディオ…」

不安に怯えたラカンカは、腕の中で啜り泣きを始めた。

静寂の中に残虐な音が響く。両手で弟の耳を塞ぎ、頭を強く抱いた。僕の耳には全てが聞えていた。救いのない絶望。

それは、終わりの見えない悪夢の時…。

父さん…母さん…。

僕はそのまま床に崩れた。

両親はきつと、間違っていないと言うだろう。

助ける事など、望んでもいないだろう。

だけど、僕は…何も出来ずに震えていた自分を、憎んだ。

暗黒の中、再び無気味な静寂が訪れた。

扉を隔てた向こうで、両親がどうなったのか。

僕は理解していた。理解しながら、抑えきれない嗚咽を漏らした。

上から押し掛かる後悔が、僕をどん底へ押し潰す。

ごめんなさい…。

泣き出した僕に、ラカンカも一緒になって号泣した。

許して…。父さん、母さん…ミオ…。

僕たちは互いに強く抱きあった。

そして、疲れ果てるまで泣いた…。

2. 悪夢の時（後書き）

次回のみ、更新は1／7（金）に変更します。

3. 舞い降りた神

身体を揺さぶる振動に跳ね起きた。

夜明けが来ていたんだ…。

扉を休みなく叩く音。僕たちの名を呼ぶ隣人の声に、恐る恐る鉄扉を開けた。

彼らもきつと声を聞いていたのだろう、玄関先には大勢の見知った顔があった。

みんな思い詰め、泣き腫らし、蒼ざめた顔で見つめる。

一晩中、扉に縋っていた僕は、酷い顔をしていたのだろう。

漸く頭を突き出した瞬間、全員が涙を溜めた。

彼らは両親の姿を見せないようにした。

だけど、力任せに押し退けると、脱兎の如く飛び出した。

陽に照らされた両親は無残な姿だった。

上に被さった父さん。その下では、母さんが丸くうつ伏せている。

僕たちは呆然と立ち竦み、暫くこの現実を疑った。

見る影もない両親の姿に、弟が泣き出すかと思った。

でも、意外にしっかりと受け止めていた。

弟と二人、父さんを有りつた力の力で起こした。

手を貸そうとする隣人に、僕は頑なに断った。

固い。まるで、石のよう。父さんは不思議なほど、体勢を崩さなかった。

母さんの懷に守られていた妹は、幸運にも一命を取りとめていた。

「生きているぞ…」

周囲から喜びの声が上がる。

だけど、喜んでばかりはいられない。彼女の両目は、残酷に裂かれていた…。

僕は無我夢中で、両掌を傷口に当てていた。

幼い頃から母に伝授された技。

いつか立派な>癒し手<になって、人々の為に生きる。
そう心に決めていた。

そんな僕にとって、これが生まれて初めての癒し。
まさか、妹の為に使う事になるとは…。

掌の間から漏れる、白く小さな光。

それを、ラカンカは不思議そうに見つめた。

「>癒し手<だ…」

隣人たちの驚嘆。掌の熱に手ごたえを感じる。

せめて傷跡だけでも無くしてやれたら。今ならまだ間に合うかも…。
無言で立ち上がると、母さんの腰袋から覗く療材を探った。

母さんがやろうとしていた事…。僕なら、きっと出来る。

隣人たちを振り切り、弟妹を連れて館へ戻った。

それから連日、ミオと二人で部屋に籠った。

全身全霊を注ぎ、癒しに集中する。

両親の弔いの時も、ラカンカが寂しく泣いた時も、一步もそこから
出なかった。

「オプシディオ、開けなさい！」

隣人たちは皆、僕の気がおかしくなったのだと思った。

誰に何を言われようと、全く顧みない。

ろくに食事も取らず、妹と籠りっきりの毎日。

まるで癒し手の神が僕に宿り、奇跡の力で支配しているかに見えた。

ミオの全身に手を当て、蝕む病を探る。

そして、幾日も経ったある日、とうとうそれをつきとめた。

ミオは病なんかじゃない。心でモノを見る、生まれながらの>心眼<。

しかし、皮肉なことに、完全に視力を失うことで、力のバランスを
取り戻しつつあった。

ミオを抱いて漸く部屋を出た時には、二十日が過ぎていた。
狼狽する隣人。

痩せて乾いた身体を見つめ、暫くの間、言葉を失っていた。

彼らの間から、小さなラカンカが飛び出して来た。

がむしゃらに抱きつき、僕の胸に顔を擦り寄せる。

「一人にして、ごめん…」

ミオの為とはいえ、幼い弟を置き去りにした。

「親の弔いもしないとは…」

隣人たちの非難。返す言葉もなく、弟を強く抱き締めた。

すると、彼は首を振った。

安堵でくしゃくしゃの顔を上げ、僕だけに聞えるようにそつと言う。

「好きだよ…オプシディオ」

大粒の涙が溢れ出した。

その言葉は魔法のように、僕の両肩に取り憑いたモノを払い落した。

ごめん、ラカンカ…。

これからは僕が守る。もう、誰にも、辛い思いはさせない。

ミオとラカンカを抱きよせ、啜り泣いた…。

十三になる頃には天才的な>癒し手<として名が知れ渡っていた。

一心不乱に没頭し、術を磨く。

力を得れば得るほど、それと引き替えに、見えない憎しみが膨れて

行った。

>真の名を呼ぶ者<の不在で、奈落に落ちた世界。

傷ついた隣人が運ばれて来るたび、両親を思い出した。

同時に、無力だった自分の姿を突きつけられる。

あの時の僕とは違う。もう、何も出来ない僕じゃない。

どうしようもない苦しみが甦り、無力な子供へと引き戻す。

幸せを奪った一族が憎い。

僕の魂を奪った一族が、憎い…。

両腕の間から顔を上げた。

蒼ざめたもう一人の僕が、鏡の中から見つめる。

一族に忠誠を誓いながら、一族を憎む顔。

女神の仮面が、僕の醜さを覆い隠していた。

4. 塀の向こう側

「ミオは…?」

屋敷に入る日。玄関先で馬に荷を積んだラカンカは呟いた。

「まだヘソを曲げている」

僕は溜息を零しながら、鞍を確認した。

ラカンカが＞同志＜になると告げた日、ミオは怒り狂った。

「信じられない、何で＞同志＜なの…!? 一族なんか仕えて、それが名誉だなんてどうかしてる」

ミオは誰よりも一族に対して敏感だ。

当然と言えば当然。＞支配＜を知らない彼女にとって、忠誠は無意味だ。

「そんなに言うなよ。ファリニス様は立派な方だったんだ。悪いのはあの＞男＜だし。それに、俺は師匠マスターになりたいんだ。ミオには分かんないだろうけど、俺は…強くなりたいんだよ…」

俯きながら語尾が消えていく兄を、ミオは苛立ちを込めて見つめた。そして、唇を噛み、大粒の涙を浮かべた。

「好きにすれば！兄さんをあの一族に取られる悔しさは、兄さんには分かんないだろうけど！」

ミオは癩癪と一緒に、ソファに突っ伏した。

あれからというものの、ラカンカと口を利こうとはしない。

「ラカンカの将来の為だ。いい加減、認めてあげなさい」

僕がどんなに間に立っても、彼女は頑なだった。

「そっか…」

ラカンカは残念そうに馬に跨った。

僕だって喜んで弟を送り出す訳じゃない。だけど、まさかミオがここまで頑固とは…。

「兄貴」

しかし、ラカンカはいきなり顔をほころばせ、興奮して言った。

「見て。二階の窓。」

弟に言われるまま、さり気なく振り返った。

そこには、カーテンの陰に身を潜め、顔を覗かせたミオが居た。

見えもしない兄を窓越しに感じようとしているのか。片手をガラスに這わせていた。

「素直になればいいものを…」

吐息混じりに零す僕に、ラカンカは白い歯を剥いて笑った。

「『好きだよ』って伝えておいてよ」

好きだよ…か。

呆れて微笑する傍らで、素直に育ってくれた弟に感謝した。

僕はラカンカの保護者として呼ばれた。

今でこそ、屋敷の敷地に入れる者は滅多にいない。

僕たちは重厚な壁が聳える門塀前で馬を下りた。

「どうぞ、こちらへ」

門兵に導かれるまま、巨大な門を潜る。

全ての大きさが予想を上回っていた。

民の街に燦っている以上、一生目にする事のない華麗な建築物。

威圧すら感じる塀の奥に、こんな美しい屋敷が隠されていたとは。

圧倒された僕たちは、暫く言葉を失っていた。

しかし、それに反して、中庭は酷く雑然としていた。

生い茂っていたはずの木々は枯れ果て、芝生も黄ばんで剥げていた。

手入れすら不可能な荒れ地は、主のいない寂しさを醸し出す。

表の顔と裏の顔。

ここはまさに、世界の縮図だ…。

「みんな兄貴を見てるよ」

ラカンカはそっと囁いた。

謁見の間に向かう道すがら、同志たちが一瞥を向けていた。

「兄貴、目立つから」

弟は自慢を込めて笑う。僕は複雑な気持ちで苦笑した。

謁見の間は静かで冷たく、ぴんと張った厳かな空気に包まれていた。玉座前でブロジュ様を待つ。

その間、落ち着かない弟は小声で喋り続けた。

「すごい：何か実感が湧いて来た。今日から俺は＞同志くになるんだね：」

ラカンカの心は、すでに僕から離れていた。

開かれた前途に夢中になっているんだ：。

扉が開いた。

僕たちはすぐさま身を屈め、頭を垂れた。

「顔を上げよ」

広間に入るなり声掛けをして下さったのは、あのブロジュ様。

凜とした発音が心地良い、温かい声だった。

「良く来たな、ラカンカ」

歩きながら気さくに零したブロジュ様は、僕たちの前に立った。

「立て、立て。堅苦しいのは好かん」

僕は漸く顔を上げ、その慈愛と威厳に満ちた目を見つめた。

これが：ブロジュ様：。

彩られた皺の奥に浮かぶ微笑み。長い銀の毛髪が光を吸い込む。

僕たち兄弟を交互に見つめ、そして、髭を軽く撫でて言った。

「そなたが、兄のオプシディオだな」

「はい：」

ファリニス様亡き後、民を絶望から救ったのは、執政であるこのブロジュ様。

ラカンカでなくとも、畏敬の念を抱く。

「天才かつ美貌の癒し手だと、ここにも噂が届いておるぞ」

ブロジュ様は鼻を鳴らした。

「は：恐縮です」

「そして、数々の功績：なんでも、聖剣士の称号を得たそうじゃな」
僕を興味深く見る。

「そのみならず、弟妹をここまで育てあげたとは…ご苦労であった」

弟が話したのだろう。その言葉には、僕に対する深い労いがあった。「もったいないお言葉…ありがとうございます…」

胸に熱いものが込み上げた。

まさか、ブロジュ様にこんな言葉をいただけるなんて…。

「ラカンカは類まれなる才能を秘めておる。恐らくは今後、わしの右腕となるだろう。果ては一族の為、本日より同志となる事に異論はないか」

心が揺れなかったと言ったら嘘になる。

秘めた闇がチクチクと刺したが、僕はそれを閉じ込めた。

「いえ…」

この方の元なら…。

「弟…ラカンカを、よろしくお願いします」

ブロジュ様の力になれるのなら、異論などあるはずがない。

僕はそう自分に言い聞かせた。

別れを惜しむ間もなかった。

目の前のラカンカは、もう僕のモノじゃない。

でも、これでいいんだ…。

寂しさより喜びが勝った弟は、自信で光り輝いている。

「たまに顔を出すから」

さっそく法衣を纏ったラカンカは、僕に言った。

「^{マスター}師匠になったらな」

ちよっとした悪戯で返してやる。

ブロジュ様に頭を下げ、足早に玉座を後にした。

中庭を出て一人きりになった途端、込み上げる寂しさ。

ほんの少し立ち止まり、呼吸を整える。

しかし、誰も居ないはずの空間に他者の気配を感じた。

振り返った先には、人知れず佇む男が居た。

いつから居たんだろう、限りなく存在を消そうとしている。

だが、空気と一体になるには、あまりにも印象的な姿。

灰色のまだらな髪が端正な鼻筋を際立たせ、僕を一瞥する鋭い瞳が静寂を纏った。

灰色の目…。

「門はあっちだが」

彼は淡々と視線で指し、僕を促した。

もしや…。

決まり悪く頷きながら背を向けた。

ただ一人、異彩を放つ男。彼があつた、>灰色の剣士<なのか…？

5. 新たな使命

ラカンカは一時もしない内に見習いを卒業していた。
前代未聞の早さで昇級し、土産話を持つてくる。

その一方で、街を覆う靄は濃さを増していた。
不安が民を追いつめ、街中が暗く沈んで行く。

「兄貴！」

その日も弟は、何の前触れもなく帰って来た。

よほど歓喜しているのだろう。エントランスに入るなり、見境なく叫んだ。

「ついに師匠だ！」
マスター

診察に集中していた僕は、客と共に振り返った。

「こら、仕事だ……！」

躊躇わず睨みつける僕に、弟は肩を竦めた。

しかし、驚いたのはそれだけではなかった。

ラカンカの後に続いて入って来たのは、マントを纏った大きな男……。

彼は玄関を潜るなり、漆黒のフードを外した。

その下から零れ落ちた、灰色のまだらな髪。

端正で隙のない鋭さを醸した、あの男だった。

僕は暫く呆然と見入っていた。

目立ちすぎるその容姿に、来客達も目を白黒させている。

「それならば、待たせてもらう」

男は端的に言い放ち、無遠慮にホールの奥へと進んだ。
なんだ……。

「バージノイド様だよ。兄貴に大事な用事があるんだって」

小声で耳打ちしたラカンカは、その後を追って行った。

やはり、彼が灰色の剣士……。

バージノイドといえば、プロジュ様がもっとも信頼している人物という噂だ。

そんな男が、どうして民家などに…。

勿論、ラカンカが師匠^{マスター}になったことは喜びだ。

しかし、それ以上に、男の用事とやらが気になって仕方がなかった。早々に仕事を終え、エントランスを見回した。

それを待ち望んでいたのか、ラカンカの方から顔を突き出してきた。

「やったな、ラカンカ」

僕の賛辞に、弟は満面の笑顔を向けた。

「悪いが、館を見せて貰った」

館の地下から出て来たのは灰色の男だった。

僕たちの会話を断ち切り、吹き抜けの二階を見つめた。

「館を…？」不審をあらわにした。

館の主である僕に、断りもなく、どうして…。

「なるほど、なかなか立派だ」

彼は淡々と零し、懷から豪華な巻紙を取り出した。

「読め。ブロジュ様、直々の特命だ」

それは、紅い蠟と糸で厳重に封印された物だった。

蠟に刻まれたブロジュ様の印璽。

見るからに重みのある書簡に指先が震えた。

金縁の上質な紙に綴られた形の良い文字。

僕は急いで目を走らせた。

そこには、簡潔に要点のみが書かれてあった…。

この館の地下に、屋敷と繋がる＞抜け道＜を作る。

一族の為の秘密の抜け道。ここが、彼らの避難所として使われるのだ。

「どうして、ここなんだ…」

僕は書から目が離せないまま、問いかけた。

「貴殿の才を見込んでのことだ。これで、＞同志＜と同等の恩恵を与えられる。異存はあるまい」

バージノイドは、僕の震える手から巻紙を取り上げた。

恩恵…冗談じゃない…。

どうして一族の為に、僕たちが巻き込まれなきゃならないんだ。恩恵など、いるものか…！

「断れないんだろう…？」

僕の声は酷く掠れ、悪夢のような宣告に朦朧とした。

「断る…」

バージノイドは、目を細めて怪訝に見つめた。

しまった…。忠誠を誓った民にとって、一族の力になれるのは本望。＜断る＜という選択肢があるはずもなかった…。

「いや、うちには少々癖のある妹がいてね。それが気がかりなだけだ…」

この男は食えない。慎重に発しなければ…。

「もし断るなら」男はすかさず返した。

「私はおまえを捕えねばならない」

「捕える!？」

ラカンカは一瞬にして蒼ざめた。

「これは＞真の名マコトを呼ぶ者＜に関する極秘任務だ。おまえが他者に漏らさないよう監禁する。私たちはこれを無事に敢行させる為には手段を選ばない」

脂汗が滲んだ。男の灰色の目が鋭く光る。

「厳しいな」僕は軽く流しながら、精一杯の微笑みを浮かべた。

「断るはずがないじゃないか。こんな名誉なこと、買っても受けたいくらいだ」

喜びを湛える僕に、ラカンカは胸を撫で下ろした。

男の静かな目は、僕の奥底を見透かしているかに見えた。

感情が読めない…。

「この館は先代から受け継いだ物だ。僕のものじゃない。でも、きつと先祖もお喜びになるだろう。そして、これから継いで行く子孫たちも」

僕は覆い隠しているか。この仮面が、上手く僕自身を閉じ込めているか。

品よく微笑し、左の掌を向けた。

「この＞癒し手くにかけて、一族に忠誠を誓う。どうかブロジユ様に『身に余る光栄』だとお伝え下さい」
胸にそれを押しつけた。

「ブロジユ様もお喜びになるだろう」

男は踵を返しながら、無造作に言った。

そして再びフードを被り、振り返る事なく去って行った。

「問題はミオだな…」

居残ったラカンカは、大きな溜息をついた。

「ああ…」

やるせなさが咽喉を絞める。

いいだろう…。

この僕が、＞真の名を呼ぶ者くを鼻先で見てる。

どんな顔をしているか、この、僕が…。

6. 押し寄せる闇

あれから瞬く間に月日が流れて行った。

館の地下には＞抜け道＜が繋がり、術によって閉ざされている。

僕はそのことも忘れ、日増しに増加する凄惨な出来事に悔しさを募らせた。

片時も安らぎのない世界。

エントランスを埋める民の姿は、傷つき、痩せ細り、正視するのも憚られた。

＞真の名を呼ぶ者＜が復活した。

人々はその噂で湧きかえったが、僕は悪戯な希望など抱かなかった。それよりも早く、この現状を何とかしてくれ…。

噂が流れてから、ラカンカは一度だけ戻って来た。

「翔平さまは素晴らしい方だ」

新たな＞真の名を呼ぶ者＜は、不思議な名を持つ異界の住人。

弟は僕たちの事など目もくれず、延々とその話を語った。

「兄貴もきつと好きになるよ。何ていうのかな…人柄も穏やかで、飾り気がなくて、繊細で。まだ戸惑っていらっしやるけど、でも、秘めた力は到底かなわない。ああ、楽しみだなあ…」

心の底から興奮している。

「あの方が当主になったら、きっと世界が変わるよ！その為にも、翔平さまに全てを捧げる」

ミオは食卓を調えながら、冷ややかに言った。

「化けの皮が剥がれなきゃいいけど」

「ミオ！」

あのラカンカも、翔平さまの事だけは譲らなかった。

よほど好意を抱いているのだろう。いったいどんな人間なのか、僕ですら興味が湧く。

一族は僕にとって憎しみの対象でしかなかった。

いわば、実体のない幻の相手。

弟がその人物と毎日顔を合わせ、共に過ごしているというのが信じられなかった。

程なくして、世界に真の闇がやって来た。

あの、闇黒の化身が復活したのだ。

弟は無事なんだろうか…。

ひたすら祈るしかない日々。それが、どれほどの苦痛か。しかし、とうとう不安が現実になる日がきた。

僕が最も恐れていたこと。エントランスの篝火が灯った。

館中を照らすほどの業火。それは、>抜け道<が使われたという場合。

僕は煌々と燃え盛る炎を見つめ、悪い予感に震えた。

屋敷から誰かがやってくる。何があったんだ…。

地下に潜り、物言わぬ扉を凝視した。

誰だ。>真の名を呼ぶ者<なのか…？

寝間着姿のミオが、壁を伝いながら迫って来た。

意識を彼方に向けているのか、ぼんやりと夢中を漂っている。

「誰か分かるか。ラカンカも一緒か？」

答えを急ぐ僕に、妹は深刻に首を振った。

「違う、ラカンカじゃない。知らない人…でも、酷く傷ついている…」

ますます跳ね上がる鼓動。やはり、何かがあった…。

痺れを切らす頃、重厚な鉄扉の隙間に青白い閃光が走った。

人間の力では到底動きそうもないそれが、微動と共に開く。

隙間から流れ込む冷えた空気。カビ臭く饅えた異臭が鼻を突く。

闇から零れ落ちるように這い出て来たのは、黒革の法衣を纏った銀色の老人だった。

「ブロジュ様…！」

僕は急いで取りつき、伏した老魔術師を助け起こした。掌に伝わる全身の軋み。

酷い衝撃を負った身体は、動いているのが不思議なほどだった。

「すまない…」

彼はしきりに、そう呟いていた。

それが、どんな意味を持つのか…。

「ラカンカは!？」ミオはブロジュ様に向かって叫び散らした。

「兄さんに何があったのよ!」

飛びかからんばかりの妹を、僕は片手で押さえつけた。

しかし、ブロジュ様は首を振った。

「すまない…」

そして、僕たち兄妹を見つめた。

彼は語った。

囚われた翔平さま。そして、闇の奇襲。

屋敷が墜ち、ラカンカが…自らの意思で捕虜となったこと…。

「やっぱりそうだ。一族に関わるからこんな事になったのよ!ラカ

ンカに何かあったら、あんた達を死んでも許さない!」

妹の暴言を止められなかった。

止められるはずもない。僕だって、同じ思いだ…。

悔しい。どうしてなんだ。ささやかな幸せが崩れて行く。

いったい、僕たちが何をしたと言うんだ。

ラカンカ…。

「そなたの弟は…立派だった…」

ブロジュ様は僕の手を握って言った。

立派…一族の為に危険を冒すことが、立派なのか…?

怒りを隠しきれず、ブロジュ様から顔を背けた。

どうしてその道を選んだんだ、ラカンカ…。

——俺は…強くなりたいんだよ——

馬鹿。おまえは、十分強いじゃないか…。

——大丈夫だよ。ミオとちゃんと確認したから安心してよ——

どんな時でも、僕を笑顔で安心させていた。

——好きだよ、オプシディオ——

誰よりも優しいおまえが…。

僕は両手で顔を覆った。

「兄さん…」

ミオが背中に縋りついてきた。

僕を掻きまわす目まぐるしい感情。

追いつめられた状況で、なお忠誠を貫いた弟の心情を思った。

あいつは、いつだってそうだ。

僕と同じ場所に立っていたはずなのに、ただ一人、先に行く。

憎しみに囚われ、止まり続ける僕と違って…。

立派…。

「ありがとうございます…」

僕はブロッジュ様に言った。視界が涙で揺れる。

悔しさ、憎悪、辛さ、不安、恥ずかしさ。

ミオの体温を背中に感じながら、弟を想い、涙を流した。

7. 傷ついた鳥

あの夜は、再び灯る松明の炎で始まった。

ブロジュ様がここに辿り着いて二日後の事だ。

僕たちは予想もつかない来訪者に、地下の扉前で固唾を呑んだ。

「この>道<を知る者は限られている」

唇を引き締めたブロジュ様は、期待と不安で複雑な顔をした。

長い間だった。

口を開く者はなく、ミオも階段で膝を抱えていた。

今度もラカンカではないという。

それなら、誰なんだ…。

待ちきれず業を煮やした頃、扉が閃光を放った。

厚い鉄板が揺れ動き、甲高く奇妙な軋みを上げた。

身構える僕たちの前に立ち塞がっていたのは、思いもよらない人物。

灰色の男だった…。

「バージノイド！」

彼は怪訝に周囲を見回すと、驚嘆したブロジュ様を見て安堵の色を浮かべた。

「ブロジュ…」

全身が黒く煤け、無残に裂けた傷が剥き出しになっている。

まさに戦から生還した勇者。その姿に吞まれ、僕たちは暫し沈黙した。

しかし、彼の発した一言で、緊張感が高まった。

「翔平がいる。手を貸せ」

「翔平…!?!」

バージノイドの後ろから、恐怖としか形容できない猛獣が顔を突き出した。

全員が後ろに飛び退いていた。

「安心しろ、仲間だ」

畳みかける男に、僕たちは目を丸くして頷いた。

＞抜け道くを塞ぐほどの巨体。白い毛並みに太い四肢。薄闇に光る眼は、海底よりも深い青。

白虎…。初めて目にする美しき獣に、身体の芯が震えた。

それは大人しく身を伏し、うねる背中を持ち上げた。

「翔平…！」

その上には、獣の体毛を掴んだまま、うつ伏せになって意識を失っている者がいた。

真の名を呼ぶ者…。

プロジュ様は杖を握り直すと「オプシディオ、頼む」と、一瞥した。抱え上げたバージノイドの腕の中で、その者の顔は土気色にくすんでいた。

一刻を争う危険な状態だ。

「急がなければ…」

どんな相手でも放ってはおけなかった。

それほど、紅く血の色に染まった姿は、凄惨で痛々しかった。

「上へ」一斉に駆け上がった。

煌々と明かりの灯るエントランス。

「ミオ、水を持ってきてくれ」

ソファに横たえながら、手短に言った。

篝火の下、僕は初めて＞真の名を呼ぶ者くを正視した。

これが…翔平さま…。

胸と腿に大きな掻き傷があった。額には黒く固まった血糊。

全身に怪我を負い、漏れる吐息は微かだった。

しかし、それ以上に僕を驚かせたのは、彼がとても若く華奢な青年だった事だ。

長い手足。乱れた漆黒の髪。

汚れているにも拘わらず、異国の匂いを漂わせた、繊細で魅惑的な顔立ち。

こんなに、小さく美しい若者が…真の名を呼ぶ者…。

信じられなかった。いや、信じたくはなかった。

これが、絶対的権力者の姿とは…。

もっと、もっと…憎む対象に足る人間であって欲しい。

力強く、醜く…もっと…。

両掌で体中を撫でた。

癒しの波動に答え、翔平さまの指先が僅かに動く。

彼の身に何があったのか…。

身体の傷よりも深い心の傷が、彼の生命力を奪っていた。

初めてだった。

掌から伝わる感情。彼が伝えているのか、僕が感じ取っているのか。翔平という青年は、心の奥底で泣いていた…。

「もう大丈夫ですよ、僕がいますから」

引き摺られて行く哀しみ。そっと頬を撫でる。

瞼の下で動き続ける眼球。そして、不安そうに眉を顰めた。

「安心して眠りなさい…」

両手で目を覆った。

次第に止まる指先。落ち着く呼吸。

土気色の肌に赤みがさし、漸く眠りに落ちて行った。

それから彼は、三日三晩眠り続けた。

僕は片時も離れることなく、癒しを続けた。

憎んでいたはずの相手…。

長い睫毛に蝋燭の明かりが揺れるたび、復讐するなら今だと感じた。

何度か首元にも手を添えた。

だけど、重荷を抱えた華奢な身体に、力を込めることが出来なかった。

絶対的権力者、真の名を呼ぶ者。

ラカンカの言う通り、本当に君が世界を変えるのなら…。

僕たちの希望になれるのなら、君を救ってみせよう。

例え、憎しみに蓋をしても。

翔平の瞼が小さく痙攣した。大きく息を吸い込む。

漸く訪れた目覚めの予感に、その顔を覗き込んだ。

起きろ、翔平。僕に見せてくれ。君という人間を…。

彼は、ゆっくりと目を開けた。

そこから覗いた瞳は、白目との明暗が際立った、とても澄んだものだった。

君が、翔平…。

僕の身体に、感動に近い震えが走った。

心許なく泳ぐ視線。いったい何を探しているのか。

「どうですか、気分は…」

視線を合わす僕を、彼は不思議そうに凝視した。

静かな瞳の奥に滲む、孤独な翳。

「驚かせてしまったかな」

そうか。これが、君なんだね…。

分かった気がするよ、ラカンカ。何故おまえが、彼を愛するのか。

「まだ夢の中に居るようだね」

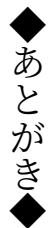
もっと僕に見せてくれ。君の、>真の姿くを。

それまでは…。

「僕はオプシディオ。ラカンカの兄であり、癒し手だ」
君を愛する下部でいよう…。

— E N D —

7. 傷ついた鳥（後書き）



あつという間のサイドストーリーも今回で完結しました。
最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。
感謝しています。

「真の名を呼ぶ者」シリーズも、これでひとまず終了です。
次回作は少しお休みをいただいて、大人向けのダークファンタジー
を連載する予定です。
また、ご縁がありましたら、こちらも覗きにきていただけたら嬉し
いです。【下記追記あり】

それでは、本当にありがとうございました！
皆さまに、たくさんのLOVE…。

Chani 2011. 2. 1

【追記】新作「紅い月がのぼる塔」は、エロティック描写がある為、
18禁ムーンライトノベルで連載開始しました！ぜひ覗きにきて下
さい☆（2011. 7. 8）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6211p/>

女神の仮面

2011年10月6日18時29分発行